

洪作は、突然、激しい泣き声が起こるのを聞いた。それはなんの前触れもなしに、いきなり一人の少女の口から出された激しい泣き声であった。嬰兒えいじが時おり火でもついたように激しく泣きだすことがあるが、ちょうどそれに似ていた。泣いているのはあき子であった。両の手のひらを顔に当て、肩を小さく波打たせながら、激しく鳴咽おえつしていた。身も世もなく悲嘆にくれているといった泣き方だった。

一座の者は、突然の出来事にあっけにとられていたが、しかし、すぐあき子がなんのために泣きだしたかということは理解した。そうしたことを理解させるような緊迫した空気がそこにはあり、あき子の発作をごく自然に受け取らせるようなものが、すでに用意されてあったのである。

洪作ははっとした。そして、そうしたあき子の抗議を心に痛く受け取りもし、またはなはだ迷惑にも感じた。洪作は自分がひよどりの死体を手にしていることで、あき子の非難と抗議がひたすら自分に向けられているのを感じた。

「これ返すぞ。おまえのだからな。」

洪作は是が非でも、ひよどりの死体を幸夫に引き取らせようと思った。

「おれのじゃないや、洪ちゃんのわなだぞ。」

幸夫は二、三步後ずさりして言った。洪作は厄介なことになったと思った。洪作は一刻も早くひよどりの死体を自分の手から離れたかったが、今さらそれを地面の上に置くわけにもいかなかった。

「やらあ。」

また洪作は幸夫に言った。すると今度は何を思ったのか、幸夫はそれを受け取ると、いきなり石でも投げるように、投球のモーションで、それをがけの向こうへ投げた。そして、

「洪ちゃ、行こうや。」

そう言うと、女の子供たちの一団をそこに置いたまま歩きだした。洪作はすぐ幸夫のあとを追った。幸夫のとった解決法は必ずしも最上のもとは思われなかったが、しかし、一つの解決法であったことは事実であった。洪作は自分も早くそうすればよかったと思った。荒っぽい行為ではあったが、明らかにあき子の抗議への反発もそこにはこめられてあった。

洪作は、小鳥をとることの残酷さを、あき子によって指摘され、それはそれで十分心にとたえたのであったが、またいっぽうそうしたあき子の抗議に対して反発するものもあった。残酷なことをしたということは十分わかっている。それを、なにも突然泣きだすといったような行為で抗議しなくてもいいではないか、そういった気持ちがあった。